昭和文学全集

27

福田恆存

花田清輝

江藤淳

吉本隆明

竹内好

林達夫

小学館

昭和文学全集

27

福田恆存

花田清輝

江藤淳

吉本隆明

竹内好

林達夫

小学館

昭和文学全集
第27巻

平成元年三月一日　初版第一刷発行

著者——福田恆存　花田清輝　江藤淳
吉本隆明　竹内好　林達夫

発行者——相賀徹夫
発行所——小学館
〒一〇一—〇〇一 東京都千代田区一ツ橋二丁目三番一号
振替 東京八—二〇〇番
電話 編集・〇三—三二三〇—五二二六
業務・〇三—三二三〇—五二二三
販売・〇三—三二三〇—五七二九

印刷——凸版印刷株式会社
製本——凸版印刷株式会社
用紙——三菱製紙株式会社
若林製本工場
著者検印は省略いたしました

定価 4,000円

Printed in Japan ISBN 4-09-568027-X

© TSUNEARI FUKUDA　TOKI HANADA　JUN ETO
TAKAAKI YOSHIMOTO　TERUKO TAKEUCHI　YOSHI HAYASHI 1989

＊造本には十分注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたら、おとりかえいたします。＊本書の内容の一部または全部を、無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版者の権利の侵害となりますので、その場合はあらかじめ小社あて許諾を求めてください。

目次

福田恆存　5

7　芸術とはなにか
60　人間・この劇的なるもの
114　芥川龍之介 I
161　ロレンス I
170　一匹と九十九匹と
180　俗物論
189　小林秀雄の「考へるヒント」
193　小林秀雄の「本居宣長」

花田清輝　205

207　復興期の精神 より
242　サルトビ・レゲンデ（「アバンギャルド芸術」より）
248　「慷慨談」の流行（「もう一つの修羅」より）
256　鳥獣戯話 より
273　群猿図
293　狐草紙
313　小説平家 より
331　霊異記
360　大秘事
382　力婦伝（「室町小説集」より）
　　日本のルネッサンス人 より

江藤淳　399

401　夏目漱石　第二部
446　成熟と喪失―〝母〟の崩壊―
539　日本文学と「私」―危機と自己発見―
563　戦後と私
574　文学と私
580　勝海舟
588　言葉と小林秀雄

吉本隆明　597

599　マチウ書試論―反逆の倫理―
633　戦後文学は何処へ行ったか
642　転向論
655　日本のナショナリズム
682　〈事実〉の思想（「源実朝」より）

島尾敏雄　より

694　戦争
717　家族
742　日常
755　太宰治（「悲劇の解読」より）

竹内好　771

773　魯迅
849　近代主義と民族の問題
854　近代の超克
885　岡倉天心

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

林達夫 893

895 『みやびなる宴』―一つの招待―
910 思想の文学的形態
915 思想の運命
920 父と息子との対話
925 作庭記
928 植物園
933 鶏を飼う
938 デカルトのポリティーク―「哲学の原理」によせて―
941 開店休業の必要
943 新スコラ時代
946 歴史の暮方―時代と文学・哲学―
949 『妹の力』
950 三木清の思い出
957 新しき幕明き
960 十字路に立つ大学
968 共産主義的人間―二十世紀政治のフォークロア―
984 上品な笑い 健康な笑い
991 ヘンルーダ
993 本のもう一つの世界
998 精神史―一つの方法序説―
1025 作家アルバム
解説
1033 福田恆存……西尾幹二
1038 花田清輝……樺山紘一
1042 江藤淳……小林広一
1047 吉本隆明……月村敏行

1052　竹内好……白川正芳
1056　林達夫……山口昌男
年譜
1060　福田恆存……佐藤松男
1064　花田清輝……古林尚
1068　江藤淳……編集部
1072　吉本隆明……川上春雄
1076　竹内好……久米旺生
1080　林達夫……編集部
1084　底本について
1086　用字用語について

福田恆存

芸術とはなにか

一　呪術について

現代の文明は呪術の虚妄を笑っております。現代の科学はその虚偽を暴露するのになんの手数も要しません。それならば、今日の科学文明は呪術的蒙昧から完全に脱却しているかどうか。現代の知性は、原始民族における自己欺瞞の愚劣を嘲笑する資格を、はたしてもっているかどうか。逆にいいますと、呪術を信じていたとおもわれる原始人は、あるいは今日もなおそれを信じ、おこなっているらしい未開人たちは、われわれがかれらをばかにするほどに――それほどむきに――その効果に頼りきっているのでしょうか。もちろん、そうだともいえようし、またそうではないともいえそうであります。

なるほど、原始人たちが呪術の無効力を承知のうえで、そのうそを楽しんでいたといえば、それはあまりにうがちすぎた解釈であり、近代的な心理主義の濫用だともいえましょう。憎むべき敵のひとがたに五寸釘をうちこんで、相手を呪い殺さんと一心不乱になっている老婆の表情に、まさか遊びの余裕があろうともおもわれません。夫の病気をなおしたいといういちずな気もちに裾をみだしてお百度をふんでいる女のすがたに、いくらなんでも冗談や洒落気を見ることはできないでしょう。が、子供のやけどをなめてやりながら《チチンプイプイ（知仁武勇）御世の御宝》と唱える母親となると、このばあい子供といっしょに遊んでいないとはかならずしもいえない。さらに、なにごとも合理主義で割りきってゆくアメリカ人たちのあいだで、たとえばひとりが《ここしばらく、ぼくは病気らしい病気をしたことがない》などといったとき、すかさず一座の連中が口々に《タッチ・ザ・ウッド》（木にさわれ）と叫びながら、こぶしでかるく机をたたいたりしますが、これを迷信だなどといきりたって排斥しようものなら、やぼなやつだとかえって笑われるでありましょう。アメリカ人たちはいうまでもなく遊んでいるのであります。

原始人の呪術のうちにもこうした遊びの要素がぜんぜんなかったとはいえない。ぼくにいわせれば、それがかなり多分にふくまれていたといえるのであります。今日の学者たちは古代の呪術に、宗教と科学との発芽を見ておりますが、その程度に――いや、それ以上に――芸術発生の契機がみとめられるということを、ぼくは強調したいのであります。

が、そのまえに原始人の、あるいは未開人の呪術とは、いったいどんなものであるか。ひとくちに呪術といってもいろいろあり、一概にはいえませんが、その方法によりだいたい三つに分類することができましょう。第一に、トーテムのような、直接に呪力を有する事物を用いるばあい、第二に、護符のような、間接になにかの呪力を媒介しうる事物を用いるばあい、第三には、これはふつう模倣的呪術と呼ばれているもので、呪術者みずか

らが媒介者となっておこないます。もちろん、第三のばあいにも、第一、第二の条件がふくまれることも多いのです。しかし、ただそれだけの理由からではなく、ぼくはぼく自身の論点から、この模倣的呪術を重視したい――それこそ、もっとも本質的な意味において芸術への可能性を多分にふくんでいるからにほかなりません。

模倣的呪術とは、科学的に申しますと――それこそまったくやぼな話でありますが――誤れる聯想作用からおこったものにはちがいないのです。たとえば、原始人たちは五穀の豊穣を促すために、ぴょんぴょん跳びはねながらその周囲を歩きまわったり、暗闇の野天に性交をいとなんだりします。いわば、類似した行為によって稲の成熟を刺戟しようというわけです。また、雨をよぶために、大地に水をまき、雲や嵐のまねを演じてみせます。そうかとおもうと、敵に擬したひとがたを焼くことによって、かれらを焦熱地獄の苦患におとしいれようとしたり、蠱惑的な香料を用いて、恋する相手の心を自分になびかせようとする。

さらにこれらの呪術的行為に呪文がともなうこともあります。いや、むしろ多くのばあい、それは呪文をともなっていたにそういありません。マオリ族の戦士は自分の投げる槍が鋭く敵の胸に突きささることを念じて、槍につばを吐きかけると同時に、《飛びゆけ、わが槍よ、大空をよぎる流星のごとくに》という呪文をいくたびかくりかえし唱えるということです。ところで、この種の呪文は純粋に宗教的な呪文とは異り、完全な比喩であることに注意していただきたい。すなわち、そこには護符的効用が期待されているのではなく、あくまで聯想作用にもとづく模倣的呪術の行為として呪文が唱えられているのであります。

たとえば、いまあげた例のように、つばを鋭く吐きかけるというような行為なしに、呪文だけが単独に唱えられるばあいもあります。マオリ族はカヌーの巧みな操り手として有名ですが、かれらは舟にスピードを与えるために、漕ぎながら翔ぶ鳥の俊敏さや水上を滑るかもめの軽快さを称えた呪文を唱えます。こんなとき、また擬音が用いられることがある。舷側にしぶく水の音や、空を切って飛ぶ槍のうなり声などがそれであります。これらの擬音も比喩の一種と考えてさしつかえないでしょう。さらに、原始人たちは、当面する障碍を除去し解決するために、自分たちの過去の伝説中の事件や、いまなお崇拝し、矜りとする英雄の事績にかりて、それを模倣する呪術的行為を生みだしていきます。たとえば、異民族の攻撃にあったようなばあい、おなじ災害にぶつかって種族を衛りとおした過去の英雄の苦悩と死と、そしてその甦りとを演じ、かれが自分たちの受難を救いにやってくるのを待つ。この演戯が形式化され固定化されたとき、まぎれもない呪術的秘儀が生れるのであります。

ぼくはいま、呪術におけるものまねの要素をとくにクローズ・アップしてみせたのでありますが、すくなくともそのかぎりにおいては、呪術に宗教や科学の芽を見ることは軽率であるといわねばなりません。もともと呪術は、人間が、かれ自身の生活の利便のために、かれ自身の意思にもとづき、かれ自身の肉体を通じて、自然のもろもろの力を支配せんとしたところに生じたものであります。それはほとんど人為を絶した場所において、超自然の魔力を期待する祈りの行為である点で、いちおう宗教とおなじ地盤に立つものにはちがいありません。しかし、その超自然力はあくまで呪術者自身の身についたものであって、現世にあらざるところから現世にやってくる神の摂理というようなものではない。呪術者はあたかも金で利権を買収するように、神々の意を迎え、神々を喜ばせ、かえってそれをおのが意のままに操ろうとしたのであります。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

人間が支配せんと欲する自然も、自然を支配している魔力も、ともに人間とおなじ次元に属し、それらは当然、人間生活の利便に供せられるべきものであります。すなわち、呪術的世界においては、自然を人間に奉仕せしめるために想定せられた神々はあっても、人間が奉仕しなければならぬ神はなかった。雨を降らせる神、風をおこす神、樹木に宿る神はあっても――いいかえれば、神々はひとつひとつの自然現象から分離し抽象されなかったので――あらゆる自然を、人間をもふくめて支配する神という観念は存在しなかったのであります。つまり呪術は時と所に応じて、即戦即決的にその場で採られる衝動的な現実処理の手段なのです。したがって、その特定の時と所とから離れて、呪術そのものの側に抽象的な体系や一般的な方法論を求めることはできない。ということは、逆にいえば、自然の背後にある魔力について統一的な神学体系を造りえないということになります。そこからまた、呪術に科学の芽を見ることのまちがいも指摘できましょう。なるほど、呪術は、今日の眼から見ていかに虚妄の迷信であるにもせよ、それは自然をよりよく改変し、人間の支配下に組みいれようと意思する点において、科学と同一の地盤に立つともいえます。呪術は錯誤するかもしれないが、科学の発展もまた試行錯誤の歴史だったといえる。しかし、そう考えてはならない。科学もまた過つにしても、そしてその発展は錯誤の歴史であったにしても、ともかくそこには発展があり、歴史がありました。錯誤はつねに現実に検証することによって卻けられてきました。通俗的にいえば、失敗が成功の母たりえたのであり、そのかぎりにおいてあえて錯誤を犯してきたのであります。が、呪術の世界に発展はない。それはつねに伝説に言及し、伝説に牽制され、伝説に韻をあわせる。ある種族にあっては、呪文のちょっとしたいいまちがいが呪術者に死をもたらすと信ぜられていました。呪術者は多く父子相伝であり、技術の秘密は堅く保たれ鎖されていたのです。

また、呪術の世界に綜合・分析もなければ、帰納・演繹もありません。それは原始人の素朴な、そして過った観念聯合から生れたものにすぎず、種々の呪術的行為の相関関係のうちに呪術そのものの組織的な原理は求められることなく、つねにおなじところに足ぶみしております。一定の呪術的行為によって、現実が希望どおり改変されたかどうかはいっこうおかまいなく、というのは呪術の効力などということはぜんぜん無視してでもいるかのように、何百年も何千年ものあいだ同一のことばが語りつがれ、同一のしぐさがくりかえされてまいりました。

宗教と呪術とのあいだに明確な一線を劃したフレイザーが、呪術のうちに擬似科学を見ようとしたのはおかしなことであります。なぜなら、すでにあきらかなように、宗教が呪術と峻別されるそのおなじ一線によって、科学もまた呪術と区別されなければならないのだ。近代の科学精神はクリスト教という厳格な一神教を母胎としてはじめて成立したものであり、トミズムのような合理主義的神学の完成に促されて、自然を解釈し処理する手がかりを得たのにほかなりません。中世の宗教は科学の発達を抑止したのではなく、逆にルネサンスにおけるその曙光を用意したのであります。というのは、一神教や自然法的神学に見られる綜合・分析の抽象能力こそまた科学の根本的な前提条件にほかならぬからです。

呪術を《庶出の科学》と呼んだフレイザーに反対して、二三の学者はこういうことをいっております。すなわち、原始人のあいだにも、呪術とはべつに科学らしきものがあり、それはあきらかに呪術とは区別されていたというのです。かれらはかれらなりに、農業や天候について確実な経験的知識をもっていて、よりよき収穫をこころがけていた。つまり人事をつくして天命を俟ったのであって、

カヌーを造るにも、魚を獲るにも女をくどくにも、人間わざで解決できる面と、人間能力のおよばぬ面と、万事につけつねに両面を見ていて、前者にはあくまで合理的な技術と経験的な知識とを援用し、後者においてのみ呪術の御厄介になったのだというわけであります。とすれば、呪術はできそこないの科学でもなければ、未発育の、あるいは永遠に発育不能の科学でもなく、それは科学とはまったくべつの現象であり、科学と対立するものであり、科学を超えて生きのびるものであるといえましょう。

さて、以上のように呪術のうちに宗教的要素を拒絶しても、また科学の萌芽を追放してみても、依然として呪術の信憑性という問題は解消いたしません。このような弁証は、あたかも天秤の両端からかわるがわる分銅を取り去っていくようなもので、呪術が擬似科学であることを否定すると、擬似宗教のほうにぐっと重みがかかり、つぎに擬似宗教ではない点を強調すると、擬似科学のほうに重みがかかるというぐあいに、いつになってもはてしがない。だいたい論理というものはそんなものにはちがいありませんが、とくにこのばあいどうしてこういうことになるかと申しますと――これはぼくの独断ではありますが――ひとびとは呪術の信憑性ということにあまり重点を置きすぎるのではないでしょうか。あるいはまた信仰ということを、あまりに近代的な解釈で処理しようとしすぎるのではないでしょうか。

ぼくがはじめに、ひょっとすると原始人たちは呪術の無効力を承知のうえで、そのうそを楽しんでいたのかもしれぬといったことは、けっしてうがちすぎた近代的な解釈どころではなく、むしろそのほうが古代人の心理に則じた考えかたなのです。おそらく、かれらは、超自然への信仰という点において、また現実に検証された効果という点において、近代人ほど潔癖ではなく、すこぶるルースでノンシャランだったにちがいありません。おそらくいくたびもくりかえされたであろう呪術の無効力に逢著して、原始人たちはいっこう幻滅を感じなかったのではないか。

近代人にはその間の事情がどうしてもものみこめない。そこでいろんな手ぎわのいい理由づけをおこないます。第一に、呪術師は呪術以外になんの能力もなかったわけではなく、たいていのばあい熟練せる医者であり、俊敏な政治的手腕の持主であり、いっぽうにおいては、よかれあしかれたくみな人心収攬術と人間的魅力をそなえている。たとえ呪術が無効に終っても、ひとびとは医者として、政治家として、人間として、かれの失敗を見のがしてしまう。第二に、呪術師は確率の法則にしたがっていたので、かれは自分の呪術が功を奏する時機を見るのに敏でなければならぬ。つまり旱魃や疫病がそうとう長日月つづいたあとが選ばれる。

第三に、ひとたび信仰が流布してしまいさえすれば、反証にたいして耳かたむけることを好まぬのが人情のつねである。すなわちひとはたえず信ずる用意をしており、なるべくなにかを信じたいのである。信仰は安楽椅子のようなものであって、これを提供するものは愛されるが、それを毀とうとするものは憎まれる。第四に、われわれは肯定的証拠を探すことは容易にできるが、否定的証拠を提示することはむずかしい。なぜなら過去における一回の成功は十二の失敗を償ってあまりあるし、のみならず、十二の失敗例を蒐集すること自体すでに難事であるから。第五に、伝説的な昔噺の事例が鞏固に呪術の信憑性を弁護する。もし現在それがうまくいかなかったとしても、過去はそのみごとな適例を豊富にもっており、それらはいずれも美しく、感動的な物語であった。とすれば、いま呪術が功を奏しなかったにしても、非はきっといまの自分たちにあるのであろう、とひとびとはおもいなおすかもしれない。

わかったようなわからぬ話であります。こ

れらの理由づけはいずれも呪術の信憑性を説明しようとしているのだが、呪術そのものについてはなにも語られていない。呪術の本質は信憑性などということとは、まったくべつのところにあるからです。さきほども申しましたように、宗教と科学とは、この点に関するかぎり、あくまで同一の地盤のうえに立っており、けっして対立矛盾するものではありません。いずれも自然の理法を客観的に説明し、その障碍の克服、あるいはそれからの救いであります。客観性こそ信仰の根本要因であり、現実に照しての信憑性こそこの唯一最高の存在理由であります。が、呪術は説明ではなく、また効果でもなく、純粋なる行為であります。ひとは信じなくても行為しえます。いや、たとえ信じなくとも、行為なしにはすまされません。信念や信仰が決断を生み、ひとを行動に駆りたてるということがよくいわれます。が、それよりも重要な反面の事実をわれわれは忘れている。ひとびとは、いかに多くのばあい、信念も信仰もなしに決断し行動していることか。あるいは、この地点からさきは信念も信仰もないというぎりぎりのところで、またまさにそれがありえないという理由で、決断と行為とに移るばあいがはたしてないでしょうか。

さらに効果ということになると、われわれ現代人にしても、原始人の愚かしい自己欺瞞をかならずしも笑えぬのであります。われわれは進歩に欺かれ、科学に欺かれ、文明に欺かれながら、しかも依然として懲りないのであります。のみならず、われわれが懲りることを知らないのは、欺かれたと気づいていないからでもなければ、欺かれるかもしれぬと予想しえないからでもない。人間は賭けた結果の敗北を知っていても、賭けずにはいられないのであります。なぜならそれが生の喜びであり、快楽であるからだ。

が、現代は効果においてのみ行為の価値を測定し、信仰の信憑性を判断しようとしています。なるほど原始人は信仰ということについてルースであり、ノンシャランであったかもしれない。が、かれらが信憑性に無頓著であったのは、うちに信ずる力を貯えていたからであります。逆説めきますが、かれらは信ぜられなくても信ずることができたのです。なによりの証拠に、われわれ現代人は近代宗教のリゴリズムにとらわれ、信仰の潔癖を保とうとして、かえって神をも人をも信ずる力を失ってしまったではありませんか。また、自然を支配する効果にのみ近代科学の発想をゆだねて以来、人間もまた自然の一部であるという観念から遠ざかり、われわれ自身のうちにある自然力の蓄積を消失しつつあるではありませんか。

呪術は自然を客観的に説明するためのものでもなく、また直接的に自然を支配するためのものでもありません。それは人間が自然と合一するための行為であり、より純粋に、そしてより強烈に、みずからが自然物であることを意識し、その自覚に酔うための行為であります。

ぼくがあらゆる呪術のうちで模倣的呪術に重点を置いたゆえんも、またそこにあります。まえに例をあげたマオリ族の呪文を想いおこしてください。この種の呪文は、お題目的な、護符的な、あるいは暗合的な呪文と異り、完全なものまねであり、比喩であります。迷信というよりは実感が問題であり、宗教よりはむしろ芸術に道を通じているものです。結果の効力などはどうでもよいので、呪文を唱えるかわにおける自己満足が目的なのです。気がすめばよろしい。というのは、そのまえに気が立っているという心理的事実を前提としているのであります。主体のかわにおける情熱が、かれをせきたてる。もちろん槍を投げ、敵を倒すことが目的であるにはちがいないが、ただそれがうまく功を奏すればたりるというようなものではなく、事前に、その情熱を発散させずにはいられぬといったところへ追いこまれているのであります。気

がすめばいいというのは、つまり気を鎮めればいいということなのだ。

とすれば、呪術はかならずしも無効果、無目的だとはいえません。それは情熱を鎮静することによって、行為に沈著と適確とを与える。槍を投げ、カヌーを漕ぐものの手もとを狂わせず、さらにそれらの行為に秩序あるリズムを与えることによって、所期の目的はよりよく達成されるでありましょう。呪術的行為は形式化され固定化されて、秘儀あるいは祭祀となっていきますが、それこそまさにこの間の事情をあきらかに、物語るものにほかなりますまい。自然の威嚇にさらされながら、しかも単調で徒労な農事に——というのは、人間の慾望とその到達された結果との差のあまりに大きな労働に——四季のそれぞれの段階に応じて、そのしごとの意義を自覚させ、主体の生理的な緊張を調整し、ひとびとに慰藉と勇気とを与えること、これが呪術的秘儀の直接目的でありました。

が、それはいつのまにかさらにより高い次元にはいりこんでいたのです。たとえ情熱を鎮静するということにしても、それはあくまで現実生活とおなじ次元に属するものでしかない。それは客体的な現実の障碍を除去し解決するという目的に直接の寄与をしないとしても、その障碍を除去せんと欲する情熱という主体的現実を調整することであり、そのかぎりにおいては、あくまで効果がねらいになっております。次元は客体から主体に移ったにしても、やはりそこでも信憑性が問題になりうるでしょう。しかし、情熱鎮静の機能がそのまま目的と化するとき、そこに現実生活とはべつの新しい次元に属する現実が出現します。

それは客体的な現実でもなければ、主体のかわにおける現実でもない——両者の融合が生みだす第三の現実であります。人間が自然に合一し、みずから自然物となるとは、そういうことをいうのであり、その自覚における陶酔に呪術の最高目的があったのであります。そこにおいては、情熱の鎮静は、逆に情熱の喚起を意味しました。故意に情熱を喚起し、それを鎮静すること——その過程が呪術的秘儀にほかなりません。

労働そのもののうちに生の喜びを味わうというのは、たしかにわれわれにとって窮極の願望ではあります。が、何千年来そういうまい話はなかった。のみならず、その理想は理想として、もし現実にそういう事態がたまさか実現されたりすると、その瞬間に、われわれはこれにたいして懐疑的になるという習性をもっているようです。なぜなら、われわれが望んでいるのは、実生活に喜びがともなうということではなくて、喜びそれ自体を実生活から分離せしめて純粋に味わいたいということだからです。現実の生活にたいする慾望でありながら、それが現実のうちに効果を見いだしうると知った瞬間に、もうおもしろくなくなるのであります。自然との合一は、それ自身がべつの自然の創造でなければならず、もとの自然に還元されてしまったのではつまらない。慾望は慾望のままでとどまることによって、生の充実感を保持しえるのです。生の役にたつ行為としての労働とその連鎖からなる現実よりの解放——それによってのみ、われわれは生きる喜びを自覚しうる。それに、生それ自体の自覚は、いかに充実した快楽をともなうにもせよ、それを日常の生活のうちにたえず持続するなど、とうてい不可能なことだ。われわれの精神はそれほどの緊張にたえきれぬのであります。周期的な呪術の秘儀が要求されるゆえんです。とすれば、われわれ現代人が原始人を嘲笑することなど、もってのほかだ。かれらは知っていたのです。なにもかも知っていた——すくなくとも現代の文明人以上に。つまり、かれらはだまされることを意識してだまされた。が、われわれはだまされまいとして、いや、だまされていないと安心していて、その結果、けっこうだまされている。どっちがりこうか、

わかったものではありません。

二　呪術の現代的考察

なるほど、文明社会においては、呪術の効果についての信頼は徐々に跡を断ちつつあります。気の早いひとは、すくなくとも自分だけは呪術の圏外に立っていると信じているかもしれません。一歩ゆずって、平穏な日常生活においては、文明は蒙昧にたいして勝利をかちえたといっておきましょう。が、戦争とか革命とか、ひとたび異常事態がおこると、ひとびとはおもわぬ興奮のるつぼにまきこまれ、原始人の呪術的信仰がたあいなく復活します。日章旗を仰いで大和民族の興隆に胸を高ならせる。進軍ラッパの勇しいひびきに鼓舞せられて敵の塹壕にとびこみ、ほしいままな殺戮に眠っていた残忍性の捌け口を与える。五箇条の御誓文や軍人勅諭が合言葉のように、いや、呪文のように語りつがれ、いたるところで宣誓やみそぎの秘儀がおこなわれる。

《一億一心》《敵国降伏》などという標語がお題目のように唱えられたのみか、《八紘一宇》がほんとうか《八紘為宇》がほんとうかなどという詮議がまじめに論議され、《ニッポン人》か《ニホン人》かについて音読の語源が究明され、位あるものの公式の場所におけるその誤用は、あたかも呪文をまちがえた古代の呪術者のように、ひょっとすると死に値するような結果になりかねなかった。ひとびとはみずからを神武天皇や日蓮や桃太郎に擬し、そうすることによって現実の障碍を処理し克服しうるとおもったらしい。模倣的呪術は二十世紀の文明社会にもなおよく命脈を保ちえたのであります。

といって、軍国主義における呪術的標語の流行を、今日の眼をもって手がるく封建意識の残滓としてかたづけるわけにはまいりません。現代の進歩的知性にとっても、赤旗は依然としてかれらの生理的興奮を促す象徴的対象であることを失わぬし、異民族の侵略を防ぐ護符的呪文として《反革命》とか《プチ・ブル》とかいうことばがしばしば用いられております。また壮士たちが好んで身につけた紋つき袴、あるいは新民会服とおなじように、ある国の元首はもっぱら労働服や軍服を愛用しているようであります。

このような現象は、しかしながら戦争や革命にのみ固有のものではないし、極右翼と極左翼にのみかぎられたことがらではありません。デモクラシーも、それをささえる不偏不党の知性も、けっして呪術的世界のそとにあるものではない。まず第一に、現代商業主義の産物である広告や宣伝は、はたしてその例外であるといえましょうか。ひとびとは百回の広告によってなじんだ歯みがき粉を、十回の広告しかされていないそれよりも、ずっと良質品だとおもいこんではいないでしょうか。また新聞や雑誌がネイム・ヴァリューということにいかに注意を払っていることか。第二に、正義・自由・平等・愛・ヒューマニズム・革命・冷たい戦争・原子爆弾などということばが、その背後になんの効力ももたずに、あるいは実際の効力をもっているにもせよ、なんとしばしば救済や恐喝の呪文として用いられていることか。

ジャーナリストこそは現代の呪術師であり、ジャーナリズムこそはその秘儀の祭壇であります。さまざまな呪文がたえず巨大な輪転機から弾きだされるようにして、われわれの戸口に殺到する。われわれはかつての古代人のようには、自然の四季や人間の生理にあわせて、おごそかに秘儀をいとなむわけにはいかない。現代では、ジャーナリズムの吐きだす呪文がいやおうなしに、われわれを秘儀のうちにまきこんでしまうのです。ひとびとは満ちたりた寝ざめの床で、産児制限の必要を説く論説や戦争の危機を報ずる記事に脅されるかとおもうと、数日後には媾和や世界平和が棚からぼたもち式にいまにも訪れそうな

気流がながれてくるというしまつです。

こうして、右から、左から、中立の立場から、呪文の放射線はさまざまに交錯し、さらにそれを支持し拒否するものが出てきて、呪文はますます倍加し複雑化してゆくのです。もっとも重大なる事実は、これらの呪術的秘儀の場所である新聞や雑誌が、あらゆる問題をあらゆる角度からとりあげながら、しかもいずれも未解決のままバックナムバーにくりいれられ、林檎の袋に化けてゆくということです。それらは現実において未解決であること、にもかかわらず活字のうえではいちおう解決され処理されたごとき錯覚を与えること、まさに呪術の世界と異るところはないではないか。

古代社会においてなぜ呪術の信憑性が保持されていたかを、われわれは毫もふしぎがることはありません。あの五つの理由は今日にもまたそのまま適用されます。いや、それらが現代ほど大規模に、そして一見それと自覚できぬほど病理的に、ひとびとの心を腐蝕している時代はなかったといってよい。無智、軽信、大義名分、固定観念、事大主義、群集心理、それらにささえられているジャーナリズム、そしてそれをたくみに操る特権階級、現代の呪術者デマゴーグ。たしかに、呪術的現象は今日もなお残存するばかりか、より猖獗をきわめているといってさしつかえないのです。

にもかかわらず、現代人は呪術を軽蔑し、その暗示にやすやすかかる原始人や未開人を嘲笑しております。が、はたして原始人は、現代の文明人がジャーナリズムの教化力にたいして期待しているほどの効果を、かれらの呪文や秘儀に期待していたでしょうか。いったいどっちが虚妄の名に値するものであるか。虚妄という点ではおそらくかれらのほうがはっきりした自覚をもっていたにちがいありません。ということは、実際の効力という点にいたっては、われわれの嘲笑する原始人の呪術のほうが、人道とか理想とかいう現代文明の呪文にくらべて、はるかに大きな効果をもっていたろうということであります。

恐るべきは、現代の文明社会にも呪術が跡を断たぬということではなく、呪術が呪術にすぎないという自覚の失われてしまったことではないでしょうか。ひとびとはだれもその魔力的暗示のそとに立っているとおもいこみ、またデマゴーグ自身のうちにも呪術師の自覚がすこしも見いだされません。いや、トルーマンやアチソンや、スターリンやモロトフや、チトーや毛沢東などはまだよろしい。が、日本の政治家ときたら――いや、政治家のことなど、どうでもいいが、わが知識人たちには――その自覚がまったく欠如している。その結果、他人のうちにしかデマゴーグを見ていない。呪術の世界は残存しながら、呪術の精神はついに地を払って消滅してしまった。

したがって、現代の呪術師たちはきまじめで、愛嬌もなければ色気もない。かれらは諧謔の精神をもたず、濫発された護符一枚、呪文一句を後生大事に、表情をこわばらせ、むきになって関所を押しとおろうとする。が、《開け、ごま》の一言で岩の扉が開いたら見ものであります。そういえば、愛嬌のない現代の呪術者たちは眼にかどたてて、ぼくのふてくされを詰るでありましょう。当然である――開かずの扉ときまれば、かれらは呪術に疑いをいだき、《開け、ごま》を口にする勇気をも失いかねぬひとたちだから。が、古代の呪術師たちは、開かぬときまった扉にむかってのみ、執拗に呪文をとなえつづけた勇者であり、自覚せる演出家、演戯者でありました。それに比して、現代のデマゴーグはいずれも、現実を操り、演出するものであるよりは、現実に操られ、演出されるものになりさがってしまった。しかも、かれらはみずから自由に現実を左右しうる演出家であるとうぬぼれ、古代の呪術師などは超自然の魔力を信じこんでいた蒙昧の徒であり、その魔力に踊

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com